

高等学校の部 最優秀賞

「生きぬいて許す心とは」

広島県広島市 安田女子高等学校 2年

八木 彩佳 (やぎ あやか)

私の祖父は八歳の時、広島で被爆しました。祖父は七十年という年月をかけ、自分の中に残る原爆への封印していた想いを呼び起こし、私たち家族に自身の被爆体験を話してくれました。私の母も今まで祖父の口からその体験の話聞いたことがなかったらしく、その話を実際に祖父の口から聞き、とても大きな衝撃を受けたそうです。八歳で被爆した祖父があれほど鮮明にあの八月六日の原爆が落とされた瞬間の目を突き指すような光、原爆が落とされた後の空の色、周囲の匂い、人々の泣き叫ぶ声など、細かい部分まで覚えていたのですから、中学生で被爆された美甘進示さんは、もっと鮮明に八月六日の記憶、傷を負い生きることさえもつらくなった日々、広島の悲惨な街並みが復興を遂げ、立ち直ってゆく姿を覚えていたのではないかと強く思いました。

日本中が「戦争万歳」、「戦争で命を落とすことは名誉である」といった空気の中、進示さんのお父さん、美甘福一さんはこのような困難に対して剃刀のように鋭い皮肉とユーモアで笑い飛ばし、ありとあらゆる問題をすべて修繕し、誰からも尊敬され、隣人のみんなからも慕われる存在であったということがこの本を読んでいて、とてもよく伝わってきました。誰からも尊敬され慕われていたからこそ、原爆が落とされて逃げていく途中などでも様々な人に助けられるということがあったのだと思います。福一さんの決断力と忍耐力、発する強く重い言葉が死の覚悟までしていた進示さんを立ち上がらせ、「死」という選択を自ら選ぶことなく「生」という選択をしたのだと私は思いました。

原爆が投下されてから日を迫うごとに生存へと向かっていく人が多く、進示さんも例外ではなく快方に向かっていっている中で、周囲の患者さんの具合がどんどん悪くなってく様子を見て、「次は自分なのではないか」という恐怖にかられ、その患者さんの症状が最悪になると必ず看護婦が注射を持って来て、その苦しむ患者に注射を打つと翌朝には冷たくなっているという「安楽死の注射」という言葉が囁かれているという状況に家族も一緒にいないでたった一人で耐えなければならないというのは私たちには想像することも、想像することさえも恐ろしくて出来ないつらさ、苦しみがあったのだと思いました。そんな毎日の中で元兵士の母親が全精力を注ぎこんで息子を看病しているのを見て、自分の家族のことを思いながら、自分の体では父や兄、母などの安否確認をすることも出来ないという状況に憤りを感じていたのではないかなと私は思います。しかしながら、その元兵士の母親が持っていた葉書きで岡山にいる母親とおばさんに自分の今の状況を伝えた、というのが、岡山大広島で広島の悲惨な現状を聞いた進示さんのお母さんの「息子が死んだ」という思い込みをなくす

ことが出来、最後の日々は喜びでいっぱいだったというのは本当に進示さんはとても良い親孝行をしたのだなと思い、感動しました。

私は、この本を読んでとても心に残っているフレーズがあります。それは、「何かをなくしたときは、何かを得るときだ」というフレーズで、大事なものを失ってしまうと誰かのせいにしたくなるものですが、その大事なものを失ったときは、もっと大事な何かを得ることが出来るという考え方がとても強く印象に残り、私の中で何かが変わるような気がしました。私は、福一さんや進示さんのように忍耐強くはありませんが、この本を読んでから、もっともっと前向きにポジティブに、どんな困難にもすぐに諦めずに立ち向かってきたいなと思いました。

このような原爆についての話などは私が広島生まれ、広島で育ったために学校などの平和学習で学ぶことが出来るのですが、最近の若い、私たちのような世代の人たちに広島に原爆が落とされた年、月、日、時刻を聞いても、日本の終戦記念日を聞いても答えることができないのだと聞いたことがあり、私は衝撃を受けました。七十一年という長い年月が経った今だからこそ、このような悲惨で残酷な人が人を殺すという選択を行ってしまった戦争を忘れることのないように、そして、二度と繰り返されることのないように、私たちのような若い世代が後世へと語り継いでいくということがとても大切だと改めて感じました。私は広島に生まれたからこそ、この原爆や戦争のことは知らない私たちの世代の人たちに伝承していかなければならないと、この本を読んで改めて思いました。